

可認物便郵種三第省信選日六十二月二十年一十元治明  
行發日五十日一箇二月每 行發日五十月三年六十三治明

# 政教時報

第九十九號

## 論說

修養論

〔社説〕

司法官諸君に告ぐ  
求信の要訣

本多高陽  
加藤玄智

## 社會

●片輪なる同情 ●佛教家の事業  
●伯林大學生 ●匈牙利の猶太人 ●羅馬教  
主と社會主義等

〔海外事情〕

## 雜錄

摩阿陀宮城内亂中の宗教

楠龍造

## 視察

米國青年會の成績

旭村生

## 信界

佛弟子小傳

近角常觀

▲報道一東▼  
▲北海道より▼

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

本誌第百號豫告

(四月八日發行)

本誌一たび政教の旗幟を樹立して世に生れてより既に四周年餘、其間眞摯を以て本領とし信仰を以て生命とし、社會活動の上に宗教的理想を實現するに勉めたるは既に讀者諸君の認知せらるゝ所也。特に昨年六月より紙面を改良し心を潜めて信仰問題と社會問題の講究に力を盡し、今や遂に第百號を發行するの時期に達せり、吾人は熟々過去の行程を顧みて自ら健全なる發達を祝し、跪きて佛天の冥祐を感謝する者也。

今や政界の腐敗益々甚だしく、教界の墮落其極に達せり、病既に膏肓に入る、輕浮なる言論姑息なる改革、何等の功か是あらむ、吾人は信仰の猛火獨り能く腐敗を焼き盡し、慈愛の徳雨唯清淨の社會を建設することを知る。吾人の研究は益々歩武を進むべき運に膺れり、乃ち來る四月八日春光和融大聖釋尊降誕の聖日を卜し、第百號を發行して聊か祝意を表し、吾人全幅の精神を捧げて猶一段の改良を加へ、以て讀者平素の愛顧に報んと欲する所也。乃ち紙面を改良し、紙數を増加し、發行數を改めて毎月一回とし、信仰修養の問題は益々劃切を極めて現時青年の正さに攪まむと欲するものを與へ、社會政策の講究は活用を主として將さに起らむとする經濟勞働の問題を解釋し、特に每號古今偉人の人格を描きて其風手に接する想あらしめ、歐米の實況を寫して足其地を踏むの感あらしめむとす。庶幾くば之を發行の紙上に徴せられむことを。

▲改正定價一冊金拾錢 ▲六ヶ月分六十錢 ▲一ヶ年分壹圓拾錢(從前の通り)但郵稅無料

政 教 時 報

修 養 論

上

信仰は修養の産物である、人物は苦心の塊である、全体宗教其物から社會が一大悲境に陥り、一旦黒闇昏昧の極に達し、修養苦心の結果として生み出したる光明である、嚴寒層を劈く霜雪の苦に耐えて、初めて梅花南枝の清香を放つのである、迅雷風烈天地も砕けむばかりの雷雨の後、夕陽青山一點の塵を留めざる清淨界を現出するのである。源平二氏の大争闘は日本全國をして腥風血雨の修羅場と化し去つた、此深酷なる人生の極點を閱了したる日本の社會は、是非共鎌倉時代の高遠なる人生觀と敬虔なる信仰とを生み出さねばならぬ、空理を以て建設する宗教、文字を以て修飾する信仰は、圖案や畫餅と一般、人生上に向て何等の價値もない、十六世紀宗教改革前の歐羅巴の社會も其通りである、飢饉、蝗、ペスト、政治的野心、社會的墮落、宗教的腐敗、殆むと出來得る限りの罪惡を集め、有らむ限りの弊害を積みためたのである、今日より回顧すればよくもかく迄空氣が沈滞したものである、四方八面如何にも世運が據塞したものであると考へる次

第である、何ら圖らむ、鬱積したは大爆發を促す爲であつた、飽まで煩り切つたのは世界を焼き盡す大燃焼を來す準備であつた、社會精神が修養鍛錬の極に達して醸し出したのが宗教の開宗者である、此社會上の宗教的經驗を一個人の上に於て反覆するのが信仰である已上は、苟も修養を心掛くるの人は、先づ此慘澹たる人世界を實驗することが必要である。全体修養と云ふことを考ふるに恰も暖室に於て草木を培養し、牧場に於て家畜を飼ふが如く考ふるものがある、こは大なる誤である、暖室に於て養ひ得る者は華麗なる草花や、熱帯地方の質の極めて柔かなる乾木に過ぎない、牧場の柵内に於て育せらるゝものは馴致し安き牛羊に過ぎない、草花は如何にも奇麗である、時節も早く開き以て珍とするに足る、然れども畢竟眼を喜ばしむるだけのことである、牛羊の肥へたるは如何にも見事である、されど莊子の所謂大牢の犠牲に供せらるゝ運命を有して居る、此の如きは皆人爲的に養ひたるものである、養はむと欲して養ひたるものである、人間でも修養せむと欲して爲したる修養の如きは何等の用をもなさぬ。

ロッキーマンの深谷に於ける氷雪巖角の間に、槎杓枝を交ふる蘆々たる萬丈の老杉を見るときは如何にも吾人の心を壯快ならしむるものがある、彼等は幾百千年の星霜を閱了して、千古黒風白雨を嘲りて居る、不幸であるか、幸であるか、人力

の至らぬ所に生へてあるが、若し之が運び出さるゝことを得たならば是こそ實に棟梁有用の材である、人間も其通りである、養ふ所のものは用ふところのものにあらず、用ふところのものは養ふ所のものにあらずである、故に修養なるものは人工を以て培養することではない、實際上の困難苦辛に衝き當りて初めて鍛ひ上げることである。

古來の偉人は皆實際上の大困苦の結晶である、釋尊の大解脱は、生老病死の人生問題に苦悶を抱けるを初めとして、内心に於ける愛慾瞋害の惡魔の迫害に戰て、遂に之を降伏するに至るまで其生ける實驗は、吾人をして實驗的宗教の模範として千古感泣渴仰に堪へざらしむるものがある、クローンウエルが眞摯敬虔なる清淨教徒の氣質を作り出したるは、彼が幼年の時ヒポコンデリヤに罹り苦悶に堪へず、夜間屢々醫を呼びた時期に胚胎して居る、ダンテ若し自ら人生に於て實際上高壯幽婉なる詩的感想を経験して、髣髴として天上に遊び、恍惚として幽明に來往するにあらずむは、何ぞ神來の妙曲を遺すことを得む、想ひ回せば古來の偉人が後昆に貽せる信仰の生命は何れも是れ一生を萬死の間に得、萬斛の愁を一點に集めたる慘澹たる心血の塊である。

苟も信仰を求むるもの、修養に心掛けるものは、此等の古聖賢の如く、實際的苦心が必要である、眞劍勝負が必要である、今日の所謂修養なるものは畢竟型に過ぎない、形式に過

中

ぎない、此の如くして得たる信仰なるものは畢竟信仰の眞似である、模倣である、眞實の信仰なるものは人生の邊畔に達して靈界絶對の堅城に據り据りたる境界である、此に至りて萬雷の爆烈するも笑ふべく、魔軍の雲集も嘲るべきである。

信仰を得むとするに理論によらむとし、若くは餘裕ある態度を以てせむとする如きは、未だ修養問題に手の達せざる頗る遠き畫なれば特に論ずべき必要がない、然れども吾人の最も注意すべきは眞摯なる態度を取り、殆むと餘裕を存せざるまで熱心に道を求め乍ら、未だ安心の境に達せざる人がある、是修養の中途にありて未だ至らざる者で最も注意すべき時代である。

古來宗教に於て罪惡の觀念の如き、厭世的人生觀の如き信仰に入るの鍵鑰として、殆んど必ず欠くべからざる宗教的經驗である、故に苟も宗教を説くものは先づ之を口にせざるものはない、然れども自ら強て罪惡視せむとし、故意に悲觀せむと企てても決して經驗せらるべきものではない、何んとなれば此等の觀念は自覺より來るものである、必しも此の如く考へざるべからず、此の如く思はざるべからずと自ら強めたりとて恰も苗を抜き蓄を啓くが如きもので何の益もない、寧ろ退て徐ろに雨露を仰ぎ、日光に而するがよい、又時としては罪惡の觀念に陥り、人生を悲觀して出づる能はざる人があ

る、是頗る注意すべき時期である、如何にも罪惡を感ずることとは慈愛に對する飢渴の情である、厭世的觀念は信仰的猛火を點すべき火藥である、されど飢渴は満足を得ずば安んずる能はず、火藥の裝置も點火せざれば何の益もない、此満足と與ふるものは宗教的妙味である、此火を點するものは佛陀の苦味を訴へ、此光明を後へにして切りに世界の闇黒を嘆くものがある、吾人は此等の苦悶中にある人を以て躑々として同情に堪へ難きものがある、此等の人は宗教的經驗に於ける疑城胎宮に幽囚されつゝある人である。

蓋し疑城胎宮なる文字は信仰の經驗上頗る意味の深きものである、若し其場合を數へ上げなば色々の種類がある、偽善的罪福に陥るものあり、詩的憐慢界に遊ぶものあり、佛陀光明に接觸せざること華中に含まるゝが如く、未だ皈依なる世界に出てざること胎裏に處するに似たるあり、悠々として既知り得たるが如く考へて猶進む可きを知らざるあり、急走急作して、晝夜十二時に頭燃を拂ふが如くするも、水のかゝらぬ水車を踏み廻はして居るが如きものがある、何れも是れ信仰實驗の城内に入りたるものなるも未だ眞摯至誠の堅城に據らずして、邊地に於ける疑惑の牢獄に迷ひ込みたる有様である、修養の實驗上最も注意すべき點である、蓋し疑城の繫縛は自ら脱し得たる後にあらざれば之を自覺出來ぬものであ

る、是猶更注意を要する譯である。

吾人が修養的眼光より見て最も惜むべきことは、正さに修養的機會が來りつゝあるにも拘はらず空しく之を逸し、自覺すべき時機たり乍ら自覺せざる人である、修養は眞劍勝負であり、實際的境遇より生み出すものとせば、人生此等の場合に遭遇することは決して容易の事ではない、人生固より夢幻の如しとせば裏深き洞察力を有するものは、慥かに之を弊なきに聞き、形なきに見得可き善のものである、されど通常の場合には一寸見難き處がある、然るに大なる迫害が來るとか、悲惨なる事變に遭遇するとか、盤根錯節の困難、天運梗塞の悲境に陥りたる時は信仰を磨くべき砥石を得たのである、正さに修養すべき機會が與へられたのである、若し俗耳より見れば不幸とか、不運とか云ふて相吊し相悲むべきことであるが、修養的眼光より云へば、又も來らぬ機會にして千歳の一遇である、所謂天の將に大任を下さむと欲して大なる試験を授けたのである、佛陀は吾人の信仰を促すべく大なる催促を下し玉ひたるものである、若し大なる試験、大なる催促を雲烟過眼視し去る如きは、修養上最も惜むべきことたるのみならず、佛天に對して最も恐るべき罪惡である。

下

吾人は修養に入るの門、修養堂奥の極に達すべきことを論じた、而して一たび堂奥に達したりと雖、夫て修養が終りたば寧ろ得意に處するよりも、失意に居る方が樂である、當時に知らるゝよりも未だ知られざる方が趣味が深い、人間の眞價がある己上は其眞價を世人が知らぬとして毫も愛とするに足らぬ、恰も黄金を埋むが如く知らるべき時來らば自ら知らるべきである、自己の行ひたる功績は世に顯れずとも功績は功績である、實際功績ありて世人の之を認めざるは恰も貯金をなしたるが如きものである、若し之を世上に發表し終るは得たる金を忽ち消費する様なものである、若し實に伴はざる名聲を博し、敢て當らざる好遇を世に受くるが如きは社會に對して過大なる借金を負ふ様なものである、蓋し事瑣細なるが如きも一旦信仰を得たる後と雖修養上頗る趣味の存する點である。

と云ふことではない、修養は平和の環を磨くが如く、松柏の益々翠なるが如くである、磨かずして光あり、養はずして翠なるものならば、却て偽物たるの證據である。古來の宗教の開祖は皆修養を以て一生を始終した人である、宗教家の一生に得意なる時代がない、其當時に於ける社會の懶眠より覺醒して大聲疾呼したものである、さればこそ社會に大なる力を遣したのである、其代りには社會は決して彼等を歓迎せぬ、寧ろ迫害した、社會は決して彼等に傾聴せぬ、寧ろ嘲罵した、彼等は時流に了解せらるべくあまり大きくあつた、彼等は救済せねばならぬ社會から賞讃を受くることは寧ろ苦痛であつたであらう、社會が迫害するだけ益々其眞理を宣傳するの必要を感じ、嘲罵を聞くに附けても如何に社會が迷ひつゝあるかを見て、坐ろに悲愴の涙を灑がれたに相違ない、此に於てや自信力は益々固くして孤峯峭峻として俗流を抜き、慈心油然として同情の雨は乾燥無情なる敵者の心胸を濕すに至つた。

全体人格の如何、人物の眞價は其實質によりて定むべきものである、其實質の中心たるや學問にあらず、技藝にあらず、才智にあらず、位置財産にあらず、自信力である、即ち信仰である、當時の評価は關すべきものではない、然れども人間は本來虚飾心に富める動物なる故、諛辭は入り安く、贊詞は兎角心腸を腐らし安きものである、故に修養の點より着眼せ

吾人は屢々親鸞聖人の一生を觀察するに如何様に考へても當時頗る冷遇されたい、又攻撃も受けられたらしい、法然聖人の如きは當初は頗る非難はあつたらしいが、後に至りては門弟四方より雲集して社會の一半は敵たると共に他の一半は味方であつたらしい、親鸞聖人に至りては一向味方なかつた、三十五歳一たび京洛の繁華を去りて流謫の奇禍に罹られて後も、晩年に至るまで再び故郷に歸る氣もなかつたらしい、さりとして東國傳道中にも毀譽紛々たるものであつた、蓋し親鸞聖人の腦中に宿れる敬虔なる信仰は時流と全く趣を異にして居つた、唯之を知るもの佛陀と同信の同朋のみであ

つたのである、其當時世人が知られざるだけ、後代に知らるることとなり、其信仰の單純にして奥深きだけ今日に至りて其實験は生命となりて光彩を放ちてある、若し親鸞聖人をして當時に歡迎厚遇せしめられたらば、果して此の如き眞摯素樸なる信仰を修養し得たるや否や、吾人若し修養的眼光を以て外界を洞察せば、人間一生に於ける天然の顯象、人事の出來事一として吾人が信念を練磨する修養の師父たらざるものはない、乃ち修養論を作る。

### 司法官諸君に一言

と呈す

本多 高陽

當世の狀態を一言にして評下するなら、恐くは不振の二字に收まるであらう、商工業の不景氣といふのは數年來の歎聲である、農業は昨年の凶歉はヒドイ話で、東奥の人間は憐れ至極の狀態に陥て居ることは、實に氣の毒の譯である、政治界も不振なら、宗教界も不振、教育界は一種の變調子を以てザワ／＼として居る、此間に在て、惟り司法官警察官のみ繁昌して、權利を振り廻はして、横行闊歩して居るは、餘り目出度い、喜ばしい現象とは言へない、賄賂を收受する教育家があれば、又之を贈與する書肆もある、これは事實で有て、最

早無争ふ餘地は無い、又其賄賂を授受するものは、固より罪惡を犯して居るに相違ない、之を貶稱して教育界の腐敗と呼び、墜落と叫ぶるも、恐く教育者は一言の申譯もあらず、神靈なるべき善の教育者が、世人より腐敗墜落と罵られて、赤面して引込まねばならぬ様では、實に情け無い、何とか早くこれを洗濯して清淨無垢の教育界を現出し度いものである、近日文部省を攻撃する者の多くなつたも、或は根本から洗濯し度いといふ意向でもあらうか、夫も結構であらうが、手は茲に司法官の餘り傍若無人なる振舞に付て、注意を與へ度い、其前に一言ことわりて置くが、予は將來は知らず、現今の位置は、教育に従事しては居らぬ、唯江湖の一浮浪人に過ぎない、友人には勿論教育者も多いが、其代り裁判官にも知人は少くない、ソナナ關係から教育者に肩を持って、司法官に喰て掛るでは無いが、併し、世間の操觚者流も、回所へ水が溜るのが、弱りめに崇りめといふものを、教育者を若くは教科書屋を攻撃する斗りて、一言も司法官の振舞には注意する者が無いのは不思議に堪へぬ。

全体教育といふものは、文部省の官吏や、若くは學校の教職員等の專賣物で無いのである、直接學校教育に對しては、是等の人々が責任を持たねばならぬは勿論であるが、社會教育といふ點に眼を注いで、一國の德義風教を維持するといふ點に付て言ふ時は、決して教育家計りの責任ではない、所謂

四級團五級團といふ様なる下層に任する者は暫く措くも、苟も社會の中流以上に位するものは、其職業の何たるを問はず、等しく責任を負担せねばならぬ等のものである、惟り司法官たり裁判官たりといふ故を以て、此責任を負担する義務なしといふ道理はあるまい、予輩は教科書に關する疑獄事件の進行を靜視するに、綴々有罪者も現はるゝに相違無けれど、又其一方には、無罪放免となる人々も、少くない、恐くは今後も放免せらるゝ人々も多々あることであらう、斯る結果は何の爲に起るかといふに、司法官が無遠慮に拘引するから起るのであらう、的確なる證據も無きに、唯々書肆の手先なる運動屋の片言隻語を信じて、直に令狀を發するからである、斯る運動員の中には、士君子が齒すべからざる破廉耻漢も澤山有る、彼等の曖昧なる片言隻語を證として、堂々たる世に位置あり信用ある教育者を直に拘引するとは何事ぞ、被拘引者の中には、聞いて見ると、ソナナ事で直に拘引するとは何たる事であらうかと呆る計りのもあるやうだ、然も稠人廣坐の中と言はず、教室に於て授業中とも言はず、直に引致するとは餘りに無遠慮の振舞ではあるまいか、中には修身の講釋中御用の聲を掛けられた人もあるとか聞いて居る、斯る場合に被拘引者は致し方なしとするも、其生徒の腦裡には如何なる思想を懐かしむるであらうか、同じ拘引せられるにして、密に夜中などに招喚せられたのと、講義中教室内から拘

引せられたのとは、學生生徒等の心象に及ぼす影響は必ず大相違があるのは明かである、何も泥棒や殺人犯者と違て、逃げ隠れする恐は無いから、分秒の時間を争て、見付け次第其場を逃がさず引致する必要は少しも無い、假令令狀は發せられたにしても、成るべく人知れず、夜陰にても執行するのは、位置あり信用ある被嫌疑者に對する禮である、又社會の秩序に對して拂ふべき義務である、苟も社會の風教名教に關心する者ならば、夫位の注意はせねばならぬ、これを否同じ拘引せられるものなら白晝でも夜陰でも同じことである、教室からでも自宅からでも異なることは無いなどいふ人は、社會の秩序といふこと裝飾といふことを知らぬ眞の俗物の言ふ所で、ドーセあるものだからコンナ片隅に隠して置くことには無いからと言て、汚穢物を持って行て日本橋の橋上へ撒き散すと同じである、ドーセ社會の裡面にはある事であるからと言て、白晝銀座街上に於て猥褻を演ずると一つ事である、何と呆る論法ではあるまいか、古の聖賢も君子は庖厨を遠くとを異にするものである、犬猫の殺されるの、殺人犯者強盜等の召捕られるのでも見れば快感はせぬのである、之を新聞の雜報などで讀んでも左程何とも感せぬ事柄も、現在目撃すれば、感觸を害することは此通りである、況んや日々吾師表と仰ぐ人を眼前に拘引せらるゝ悲況を見る、生徒等の心象に及

ぼす害毒は實に莫大なるものであらう、生徒等が今度は誰が捕られるであらう、誰某も亦授業中に拘引せられるかも知れぬと、罵り合て居るといふが、其大原因は固より教育者の缺點より起たには違ひないが、司法官警察官等の不注意無遠慮等を一層甚しくしたのである、ソレナ没義道なことをして引致した上で、證據が不十分で放免する事が起ると假定せよ、勿論法律上何の差支もあるまいが、社會に對して德義上何の面目がある、法服に對しても耻しくはあるまいか、何卒斯る事件は今少しく拘引には慎重して、豫審の進行を抄取らして貰ひ度いものである、夫でなくば聰明なる判官閣下とは、諛辭の常套言に了るであらう。

昔は法律も裁判も名教から割出したもので、士人を遇するには餘程廉耻を重んじ、体面を損せぬ様注意したから、コンナ不都合は起らなかつた、歐米の實例は予輩は知らぬから、何んとも言へぬが、聊斟酌のあり度いものである、之れ恐くは世の風教に注意する者の怠るべからざる義務であらう、雪隠や塵塚を描くは美術の許さぬ所であることを知らば、拘引にも場所と時とを斟酌して貰ひ度いものである、是我々德教の維持を希ふ者の至願である。

併し余輩の論を誤解して、嫌疑のある者でも、成るべくは見通して置くが宜しいと主張する者の如くに思つて貰つてはならぬ、裁判官等は一方に於てはかの運動屋が唯自分の不正

を蔽はんが爲に、一時遁れに言ふ片言隻語、常識あるものなら殆ど信ずべからざる怪げなる申立を當にして、無遠慮に教育家等を召捕るかと思へば、又一方には、殆ど争ふべからざる精確なる證據が有りても、其人の身分と華族であるとか、又は高位高官に居るとかすると、不問に付して置くといふ話である、其眞偽は知らぬけれども、煙の揚がるのは火がある證據で、新聞などには公然書いて憚らず、又取消の出たことも知らぬから、急度ソレナ事實がありソレに考へられる、これ等は孰れも本當でない、面白げになりてズン／＼召捕るのと、官爵權勢に恐れて、手を下し得ないのとは、決して司直官の本分でない、司直官なる者は宜しく其身の位置と職責とを考へて批難を受けない様の注意があり度いものである。

### 求信の要訣

加藤 玄智

今や我國の青年は無信仰無宗教の時代を去つて、類に宗教を求め信仰を求めつゝあるの時期に到達して參つたのであります、私が中學生活をしてをたつた時代は、洋服でも衣た紳士は、口に宗教など云ふことを云ふのは、何んだか人前でも耻かしい様な氣がしてをたつたのであります、今日日本の社會はもうさうでない、人には是非信仰が必要であり、宗教はな

くて契はぬものであると云ふことを自覺して來たのであります、私の中學時代に於ては青年に信仰などが入るものか、有爲の士は翁媪の信ずる宗教など入るものかと云ふ風であつて、無信仰無宗教唯物主義はその當時の青年一般の腦裏を支配してをたつた主潮でありました、然るに當時基督教が西歐文明の輸入と共に先づ青年者の注意を喚起し、その反動として佛教の復活となり延ひて今日に至つたのであつて、今日では宗教の必要と云ふことは青年の一般に自覺する所となつて來たのである、換言すれば今や青年は無信仰時代を去つて信仰現象であります、こゝに於て起つて來る問題は如何にして信仰を求む可きかと云ふ事である、一般青年は決して宗教の専門家ではない、皆な相當な常識を有し常務をもつた身の上であるから、徒に宗教の専門家である僧侶輩のやる様な風に佛教を研究してをる譯にはゆかないのである、そこで今是れ等の専門家ならざる青年は如何にして信仰を得可き乎、信仰を得るの方法如何とは是れ刻下最大急務たる問題である、信仰可き乎、明窓の下淨机の側原人論の註釋を讀む可き乎、是れ又可なりである、而かも是等の方法は哲學としての佛教を知る或は之を能くし得可く、信仰を得るに至つては未だしと云はなければならぬのである、そこで目下青年の輩は漸く無

信仰時代を出て、信仰覺醒時代に這入りは這入つたが、偕て如何にして信仰を得可き乎と云ふ方法に至つては各その津梁に迷つてをるのである、矧んや外部からは哲學科學の不斷懷疑の風雨を喚んで青年の心裏に時ならざる波浪を掀げしめつゝあるに於てをやである、そこで宗教家中氣早やの連中は、宗教は信仰であつて知識でない、それであるから何んでも蚊でも唯々信じさへすればよい、理窟なんか問ふ所でないとかう云ふ斷案を引いて來て、一も二もなく唯々ほく／＼として有難がらんとしてをるけれども、是れ又二十世紀の人類智進歩上到底出來得可きことでない、これは丁度腦髓を分析して磷素を得たが爲め、磷素なくば思想なし Ome Phosphor, kein Götterglaube と速断した獨逸の唯物論者と好一對で、殆んど一笑に價する外はないのである、然らば如何にして信仰を求めたらよいか、是れ一大問題である、然し自分の考へる所ではどうも簡單なる名案がないが、宗教的人格にたよつて比較的に大なる宗教的人格の感化を受けるのが一番早や道であらふと思ふ、佛教衰へたりと雖も今日尙高僧碩徳の青年を感化する龍象に乏しくないのであるから、青年は十分能く吟味して是れ等の高僧碩徳の、己れの一身を擧げて永く托するに足ると思ふ人を探びて、以てその師となし、さうしてその人の人格的感化を蒙ることに力めるのが一層近か道であらふと思ふ、是れは丁度病氣の時醫師を聘してその醫師に己れ

の一身死活をすつかり擧げて、御任せ申すと一般であるのである。醫師は身軀の病を癒すものであるとすれば、高僧碩徳は心の病を癒すを職としてをらるゝのである。醫師を擧げて己れの病氣を一任したら一から十迄醫師のさしづに從ふ如く、宗教の師を擧げてその教を聞かんと思ふものは、己れの身心を擧げて一にその師の命に任さなければならぬのである。その間或はその法話を聴き講義に侍し茶話の間にその風手に親炙し來つたならば、自然偉大なる宗教的感化に接することが出来るであらふ、自分の考では求信の要訣は、名師を擧げてその人格的感化に沐浴するのが一番捷徑であらふと思ふのである。然しこの師を擧げた以上は肝膽相照すを期して決して輕率に變更してはならないのである。それであるから又この師を擧げて我が一身を托すると云ふ迄には、餘程深い注意を要するのであつて、それは丁度醫師を擧げて我が病身を托し死活を一任するには非常な注意を要して藪醫にかゝらぬ様に用心しなければならぬと同一である。師を擧げると云ふことに付ては昔から色々有名な話があるが、彼の熊澤蕃山が中江藤樹に面會することを得て、いよく藤樹に師事することが出来たのは、前後三回程の手續がかゝつたので、その前後の歲月を合算すると丸る一年以上の歲月を閲てをるのである。蕃山の根氣が良きこと且つその師を求むるの熱心なる實に感嘆に堪へないではないか、これであるから古人は師弟

の間會に知識ばかりでなく、又その人格的感化をも併せ傳へて、眞に衣鉢を承けつぐこととなるのである。これは今日の學校生徒と教師との間に於ては見ることの出来ない奥ゆかしいうつくしい師弟の關係であるのである。古人が師を求めて止まず、己れが怖んで以て師事す可きものと見込んだものを熱心欣慕するの大なる、到底今日の青年者の間に見る様な師弟の關係でないのである。それであるから師弟の間に能く人格的感化行はれることが出来るのである。これは獨り蕃山のみでない、彼の有名な禪宗の高僧慧可は達磨の人物を瞻仰し、達磨に逢つて法を傳へてもらふと思つたが、達磨は慧可の決心の程を見たいと思つて、達磨はどうしても面會してくれなかつた、そこで慧可は自ら臂を斷つてその熱心なる求法の眞情を示めして漸く面會することを許るされ、遂に師弟の間肝膽相照すものがあつて達磨は慧可に衣鉢を傳へ佛の心印を授けたのである、かうなくては眞の師弟と云ふことは出來ず又弟子はこれ程の熱心がなくてはその師の人格的感化を受けてその品性を陶冶することが出來ないのである。今日の青年諸君にして若しこれ程の熱心赤誠を捧げてその問法の師を求められたならば、何んぼ澆季末法の世と云へども、決して然る可き師を得られないと云ふことはないのである。實に青年諸君が宗教上に安心立命を得る爲めに、その師事する所の名師を求めて一身を托さうと思ふならば、どうか是れ位の

努力は惜しまないつもりであつてもらいたいのである。實に私は宗教を専門に學ぶ人でないものが、實際的に早く安心立命を得る様な捷徑は、一に宗教上の名師に依頼して時々その人格的感化に接するなりよきはないと考へる所であります。請ふ諸君之を各自に實驗してその妙趣を味ひ給へ、余は今余が擧者に高等學校在學の日であつたと覺えてをるが、禪宗の某高僧に參禪し時々信仰上などの話があつて、その間大にその人格的感化に霑はされたことがあつたが、今左にその當時ものしたる七絶一首を附記して諸君に贈らふと思ふ。

偶受人身喜宿緣、 矧聞妙法得參禪、  
願從和尚垂箴旨、 自行化他期兩全、

社 會

片輪なる同情

日本人は一面に慈悲深くして、一方には同情の缺如せるもの尠しとせし、完全慈悲、完全同情の點より立論せば、片輪なる慈悲、片輪なる同情と云はざるべからず。所謂、恩禽獸に及ぶか如き高尚なる慈悲心は、日本人には絶えて望むべからざる也。動物虐待防止會の起る亦止むを得ざる所以乎、われ會て、生々たる鰻の料理方法を見る。之を俎上に上す

や、直に銳利なる錐を以て頭腦を穿ち、而る後刀を向へて身を割く、彼が此間の苦悶多く見るに忍びざりし。また會て、鰻の生きつくりを見る。彼俎上にありて利刀の迫害を免れしんとて地に落つること再三、悲惨の態われ多く見るに忍びざりき。また會て、叫聲を發する生きたる鵝の其まゝ毛のむしり去らるを見しことあり。思へらく、これ生きたる人間を地中に埋没するに異ならずと、何ぞそれ悲惨の極なるや。外人は會て生魚を口にせず、而して日本人は舌鼓を鳴らして之を喰ふ、固より習慣の馴致したる所とも、志想の高尚ならざるを證すべし。外人呼んで以て野蠻人となす、邦人何を以て之を辯護せんとする乎、彼動物は吾等人間の爲めに供せられたりと云ふか。彼等も亦我等と同じく生を天地間に享けたるもの、身を愛するに至りては我等と何の差かあらん、若し彼等をして我等と地位を換へて強者たらしめば、彼等も亦我等の如くせん、幸にして我等は強者の地にあり、強者の地にあるを以て弱者をイヂメ盛に虐待酷遇するか如きは、敢て強者の本領、強者の權利にあらざる也。吾等は謂れなくして無用の虐待を施すべからず、我等は鰻や、鯉や、鵝を喰ふ勿れとは云はず、唯之を殺すに其方法の宜しきを選択するのみ。彼等の生命を奪ふに無用の長時間を費すか如き斷して排斥せざるべからず。

伯林に馬肉會なるものあり、甚た滑稽に近しと雖、其實動物虐待防止會の趣旨より來れるものにして彼外人の用意や周到なりと云ふべし。蓋し馬肉會なるものは、老衰の馬をして長く勞苦に耐へしむるより、早く之を屠りて其苦痛を救はんとする同情心より來れるもの、其行爲は兎も角彼等の精神に於て感ずべきものあり。

死刑の宣告を受けたる罪人の絞臺に上るや、一分たりとも迅速に之を行ひて苦痛を減せしめんとするは司獄者の同情なり、止むを得ずして生命を奪ふ時、出來得る限り苦痛を減少せしむるは、社會に對する吾等の同情なり。古語曰はずや、惻隱の心なきものは人にして人にあらずと、惻隱の心は即ち同情の念なり、即ち慈悲の心なり。

世には乞食を憫む慈善家多し、動物を憫むに至ては眞に寥々乎たり、乞食不憫なりとせば、動物亦不憫ならずや、乞食を愛して動物を愛するを知らざるものは、これ片輪なる慈悲、片輪なる同情也。完き慈悲、完き同情を去る甚だ遠しと云ふべし。

日本人の高尙なる思想發達せずして、片輪なる慈悲、片輪なる同情心の存在する間は、動物虐待の弊や遂に止む時なからむ。然らば如何にして高尙なる志を養成すべき乎、一言以て之を掩へば曰く、他なし根底を宗教の基礎に置くにあるのみと。

佛敎家の事業

吾人の知れる範圍に於て、佛敎家の成し遂げたる事業指を屈する迄もなし、多くは失敗に終りぬ。其免因保護を看よ、貧民學校を看よ、慈善病院等のあらゆる諸種の慈善事業を看よ、克く濟済の美を完うし、社會に貢獻したるもの眞乎に寥々たり、何ぞ佛敎者の社會的信用の薄すきや、抑々社會の冷酷然らしむる乎、社會の冷酷もあらむ、其冷酷や、佛敎者自ら招く禍にして避くべからざる自然の數なり。

堅實なる精神副はずして稍もすれば貪慾の深き今の佛敎家、遂に社會の同情を買ふに値せじ、殊に佛敎家の弊として、一業に熱注するの大精神乏しく、彼も此もとて種々なる事業に手を伸ばし、後には何事も成し遂げずして終るもの比々皆然らざるはなし、此點に於ては基督敎者は巧みなるものなり、例へば偽善にせよ、表面的にせよ、誠意面に溢るゝが如き態度を以て管に社會の同情を求むのみならず、其業務に專注して曾て倦怠の色あることなし、これ佛敎者の遠く及ばざる所、宜哉彼等の孤兒院に、免因保護に白痴教育等の事業着々として效を奏するをや、社會の冷酷を慨するの佛敎者、去て自己を反省せよ、反省の力遂に人を動かすの機あらむ。

海外事情

●伯林大學生

伯林大學は此冬の學期に於て未曾有の多數の入學生があつた、前年の夏の學期には五千六百七十六人であつたが、其中二千八百五十人だけ冬の學期に残り居つた、これに冬の學期で三千二百四十一人加はつたので、總數七千九十一人とあつた。(前年の冬の學期は合計六千四百七十一人) 其中で神科大學三百六十六人、法科二千四百二十八人、醫科千二百十九人、哲學科三千七十八人、婦人の聽講者五百五十二人の割合である、そして其總計七千九十二人の學生の中、プロイセン人が五千四十六人、他の獨逸聯邦人が九百六十人で、他の歐羅巴人が八百九十五人、(内、魯人三百七十一人、埃國百三十一人、匈國六十八人、英國人三十四人、伊國廿四人、佛人廿二人等) 百四十六人は亞米利加人で四十三人が亞細亞人で、一人は澳洲人である。

●匈牙利の猶太人 匈牙利では猶太人が非常に勢力のあると云ふことは普く人の知る處であるが、其人員總數約百萬人位である、處で猶太人の職業を調査して見ると其結果頗る面白い、乃ち匈國の農業に従事して居るもの十萬人の中、たつた一人の猶太人居るのみである、百人の工業者の中にやはり猶太人一人である、百人の商人の中には七十人、百人の辯護士

醫師の中には五十人、百人の大學生の中五十人は猶太人である、猶太人が如何に或種の職業を避けて他の職業に集ることか分る、商業文學等に於ける猶太人の勢力侮るべからざる

ことが之によりて知らるゝである。

●羅馬敎主と社會主義 曩頃敎主が敎主參議の總會に於て談話された中に、當時伊太利の議會に提出されてある離婚法を非難して、是は基督敎的の秩序を破り國家をして野蠻的邪教的の基礎に立たしむるものであると云ひ、之れより基督敎的民主的の基礎に立てる行動の目下非常に必要なる事を述べ、且つ此點に就ては彼は明に其目的手段限界を示し時代の必要に應ずる行動を奨励した、去ば此點に就て或者が多少誤りた行動をとることあらば、それは決して敎會の指導の欠けて居ると云ふ次第ではないのである、敎師たるものは是等の行動に付てよく注意して、民主的の考は決して敎會の敎理と齟齬するものでなく、却て基督敎より生れ基督敎より養成されたものであることを考へねばならぬ、而るに此の基督敎的民主主義の外に全く是と異りたる理想を有し、變りたる道を取る處の誘惑的運動が追々と擴張して來た、基督敎的民主主義は飽までも社會的民主主義に對して争ひ、社會的民主主義の危険なることを喝破せねばならぬ。而して吾々は一般人民の生活に大なる貢獻をなすものであるとの事について述べたのである、以上は大略をかいつばんだのである。

●教會國 英國の所謂加特力黨の一人で最も熱心なる獎勵者たるアルと云ふ人は此頃マンズレーツで教主は教會國の事を断然放棄して伊國并に現在の關係等に就て調和の態度を取り教主は俗權を有せざる今日はむしろ以前有して居つた時よりも、自由なる行動を取らねばならぬ事を論じた、此事は非常に羅馬教府の意を害して、加特力教の機關たる新聞雜誌が盛に攻撃をなし、アルの政教分離の意見は全く紛糾せる誤解より生じたもので、實際上到底實行の出来ぬものと論じて居る、教主が同時に國家の國君たるべき觀念は未だに羅馬教府の考の中より除去する事が出来ぬと見えて何かに付けて其考へをば發表する、而し其考へが教府の云ふか如く將來事實となるやは頗る疑はしき事である、兎角一旦云ひ出した事は飽までも之を主張して乗すべき時機を待つと云ふ根柢の強きは驚くべきものである、

●伊國瘋癲取締法 伊國では未だ瘋癲保護に關する一般の法律がない、千八百七十七年以來十回以上も之に關する法案を議會に提出したか悉く否決されてしまつた、時には上院は通過しても下院でいつも破られた、今度の議會で政府が又もや之に關する法案を提出した、此法案は從來よりも注目される處となつて今回通過するかも知れぬ、其譯はベネチアの瘋癲病院に於ける慘狀が公にされ其が動機となつたのである、今左に其慘狀の次第を記して見やう、元來此病院には六百八

人の瘋癲者があつて、院長は教師で、ドクトルの資格ある、ミンレットト云ふ人であるが、此人は種々の職務を兼ねて居る爲め屢々旅行せられ常に留守である、其代理人と云ふものは殆ど醫術の何たるを解しない一個の通常人に過ぎない教師である、多少醫術の心得あるものは今年八十歳になる老醫師で、それとて常に病院に詰め切りて居る譯でもなく、老衰して居る爲め毎日診察も出来ない、病院の指揮は全く素人の教師の指導する處であつて、是には十四人の補助者と六十五人の俗人の看護人を雇ふて居る、併し病院は醫者らしき醫者なるもの一人もなく、云はゞ無政府のやうなもので、病人の治療は逆も思ひ及びばぬ事である、こんな都合であるから病院の殘酷なる噂が喧傳された、やがて審査人が来て見ると意外であつた、亂暴人なる看護人のみで一向看護の仕方を知らない、そこで病人が暴れ廻る、これを鎮めることを知らないから強制手段を用ゐる、益々騒ぎ立てるもんであるから鎖や、桎梏のものを用ゐて暴力に訴へ中には床の中にくくりつけ、または二人つゝ縛せらるゝと工合で其取扱は實に殘酷の仕方で一見震慄せざるを得なかつたさうである。食物の如きも粗食粗菜で人の食すべきものでなかつたさうである、幾年の間醫者の監督なくして居つた六百八人の病人は其苦痛いかにばかりであつた事が想像される、そこで政府は今後瘋癲人の取扱は醫者に一任して、之等の教師の手中に於て人間の苦

しみを除去するとの決心をかため、今回の瘋癲病院保護案が出たさうであるが、至極贊同に堪えない次第である。

雜 録

摩訶陀宮城内亂中の宗教

楠 鷗 浦

●御家騒動であるとか、宮城の内亂であるとか、か様なものは、何國の歴史に見ても、種々複雑なる原因事情ありて、能く調べてみるならば、人間内秘の心情に觸るゝことを得て、人心のあさましきを感じては、覺せず寒毛卓立、滿身粟を生ずることもある、亂蓬の荒れにあられた中でも、一片「ヒュ、ミンチー」の巍然として動かざるをみては、我知らず快哉を絶叫することもある、兎に角御家騒動なり、宮城内亂なりに就て、そが内秘の心情を尋ねて其終極する所をみれば、云ふに云はれぬ興味もある、鑑戒もある、

●西洋紀元前四百八十八年、印度摩訶陀宮城に起つた擾亂は、其始より宗教に關係し、擾亂中に宗教の光明煥然として輝き、終りも遂に宗教に決歸せしをみれば、摩訶陀騒動は、我等にとりて特別に注目するの價值あるではないか、また特別

の異彩波瀾あるではないか、興味あるではないか。

●提婆達多(Devadatta)と云へば、師なる耶蘇を買たユダの如く、孔子を殺害せんとした桓魁の如く、慈悲忍辱の大聖釋尊を擠排せんとした悪人の面貌がありくと想起せらるゝ、提婆達多は三度釋尊を殺害せんと企てた、その一度は釋尊が啗蘭伽山(Grindhakuta)の麓を通行せられたとき提婆山上より大石を墜して壓殺せんと試みた、幸にして其大石は當たらななだが、碎片迸り來て釋尊の足より血を流さしめたと云ふことである、此提婆が、憍賞彌(Kosambi)の人々が、釋尊のみに供養して自己に供養せざるを憤慨し、また釋尊の己を待遇すること、冷淡なるを恨み、惡智慧を以て一策を案し、先づ阿闍世王の歡心を買ひ、遂に之を教唆して父王を殺害して國位を奪はしめ、自己は釋尊を殺して新佛となり、新佛は新王の供養を受け、威福を恣にせんことを考へた、これ摩訶陀の宮城に大騒動の起る原因であつた、阿闍世とてさう輕卒に恩愛の父王を殺害しようとする様な心を起すものではない、誰れか、教唆するものがなければならぬ、提婆は實に其人である、之から見ても師や友人を撰ぶは、誠に大切であると云ふことを學ばねばならない、然し提婆は、其後阿闍世王にも棄てられ、摩訶陀國民には排斥せられ、大に困難せられた、去り乍ら剛毅敢烈の提婆は、それにも屈折せずして、別教團を建立するに至つた、けれども提婆が、臨終に臨んで、

從來自己の行動は、甚だ悪くあつたことを懺悔し、南无佛と稱へて瞑目したと云ふことである、釋尊これを聞いて、此臨終の一善心は、永遠不朽の價値を有して居ると云ふて、喜ばれたと云ふことである。

◎阿闍世の父頻毘娑羅王(Bimbisara)は誠に敬虔なる佛陀の信仰者であつた、騷動以前より釋尊に隨て、離苦解脫の法を聞いて、心に決定を得て居りしこと故、現在我惡子のため牢獄に幽閉せられ、飲食の途を杜絶せられながら、煩悶怨恨をしない、始め韋提夫人の力により、僅に飢渴を免れしも、後ほそれさへ全く杜絶せられた、遂に一國の王であり乍ら、あはれ果かなくも、餓死するに至つた、されど見よ、頻娑娑羅王は、かく苦しき牢屋にありながら佛の教を受得し、阿那含の第三果を得たと云ふてはないか、迫り來る死の前に坐して阿那含の悟を開くと、宗教なきもの、知り能はぬ境界である、然も死後頻娑娑羅王は、己を殺害せる阿闍世にあらはれ、惡いとも云はず恨めしいとも云はず、早く佛所に至りて懺悔し、清淨の人となりて、未來の苦患を逃れよと、告げたと云ふてはないか、これを子に對する親の誠である、慈悲矜哀の佛の御心をあらはしたものである、宗教ある人は、如何にけだかさものであるか、如何になさけぶかさものであるか。

◎韋提夫人(Vaidali)は、頻娑娑羅王の正妃である、牢内の王に密に飲食を送りしこと發覺し、我子阿闍世のために、ま

さに一劍の下露と化せんとした、去れど幸に耆婆大臣の救解によりて、辛うして生命のみを全くするを得た、夫人は遂に七重の深宮に幽閉せられた、又王と相見るの機會なきに至つた、夫人は深宮にひそかに釋尊を迎ひ奉りて、離苦の大道をさかれた、此場合夫人を救ふものは、金錢でもない、衣服でもない、道徳でもない、法律でもない、我生みたる我子さへ怨敵となるではないか、何々て世間のものが頼みになりませうぞ、唯だたのみになるべきは宗教のみである、夫人は賢明でありと云ひ乍らも、愚癡は婦人の常である、釋尊に向て、何でコンナ惡人を子に持たかと嘆き、なぜ提婆の如き惡人が、佛の眷族たるやと、縷々愚癡をコボシ、遂にかゝる濁惡世界は我願ふ所にあらざれば、憂惱なき光明世界を教へよと願ふに至つた、これ慈悲の宗教たる他力教の起る所以である、他力教は實に苦惱に沈める人、愚癡の人、かよはき婦人を救ふ慈悲の教である。

◎阿闍世(Agastami)と云ふ人は、大恩ある父王を牢中に餓死せしめ、其上慈母を手にかけて殺さんとしたる不孝非道の罪人である、彼は惡人中の第一流を下らない大惡人である、されど人間の本性は善である、无慘なる父の最後を見ては、中心ひそかに安んぜざるものがある、彼は殺害した父王のことを思ふては、懊惱の念湧き來て夜な夜な安眠を得なかつた、遂に之がために病氣にかゝつた、耆婆大臣は頻りにす

いめ、釋尊の前に至て懺悔して道を求めさせた、釋尊は彼が爲めに迷情執著の非を論じて、實相无相の道理を示された、彼は懇切なる釋尊の教誨に依て、再生の人となつた、清淨无垢の善人となつた、惡に強き人は善に強き人となつた、彼はこれより一生涯佛敎の外護者となり、慈悲博愛の人となつたのである、第一回の經典結集の事業を助け、大檀越となりて毎日五百人の聖者を供養したは彼である、佛敎傳持の沙門に保護を與へたも彼である、思ふに八宗の祖師と稱へられた龍樹も、其始は放蕩无頼の青年であつた、されど佛敎の感化によりかくの如く偉大なる聖者となつた、印度の英主阿育王も、其始は暴逆无殘の君主であつた、されど佛敎の感化により、彼れが如く博愛の大王となつた、彼と云ひこれと云ひ、佛敎は感化の源泉であることは、歴史上明々白々疑ふを得ざる事實である。

◎菜に棲む虫は其色青くある様に、人は周圍の事物に感化せらるゝことが多い、阿闍世王とてもそうである。始は剛烈私慾の提婆に教唆され、内にあつては姦佞の兩行大臣が種々に悪い方に導たから云ふことになつたのである、兩行大臣は阿闍世が懺悔の心を生したときに、種々の甘言を以て、之を妨せんと試みた、父王を殺して國位をとることは、史上多くの例あれば、少しも心配すべきものにあらずと云ひ、世上には善惡なぞあるものにあらずと云ひ、種々に阿闍世の善

心を妨げた、されど一方には耆婆大臣ありて、懇々と善に導たから、惡の阿闍世は一轉して善の阿闍世となつたのである、若しも阿闍世は耆婆に聞かず雨行に聞たとすれば、其運命はどうなつたであらうか、永却の運命は一髮の間に分れるのである、慎しみてつゝしむべきは、惡に遠かることである。

視 察

米國青年會の成績

(昨千九百〇二年、一年間に於ける報告)

旭 村 生

◎歐米に於ける基督教青年會は、源を倫敦に發して、今では萬國到る處に普及してあるが、其詳細なる起原歴史等は他日

述ふるとして、今は其青年會が最も著しく發達したる米國に於ける昨年一年間の成績を示さうと思ふ、全体米國は商工業が非常に發達して萬事が大仕掛である丈、青年會の事業もなかく規模が大である。

▲大勢通観 昨年一年中の米國全体に於ける寄附金は二千四百萬圓である、此の金の使用は從來の借金の返済、給與、入費及び新會場の建築に充てられたのである、昨年の事業の發達は頗る著しきものであるが、殊に製造業に従事して居る四百萬人の人々を加入せしめて、萬國聯合委員の指導の下に働いたのは目覚ましき事である、而して鐵道作業者の青年會員は五萬人以上のほり、學生の分は四萬人以上、男兒部が五萬人、而して陸海軍人及び土人印度人間に於ける會員もそれ／＼非常に増加してある、殆ど三萬人の青年が夜學校に出席した、十二歳より十八歳までの勞働せる男兒が夜學校に出席して、夜間の休養と同時に亦教育を受けた、夏期の集會が二百ヶ所ありて之に集りたる男兒が五千人ある、殊に海軍青年の爲めに初めて集會所が建築せられた、其價が九十萬圓であつた、また陸軍の兵營附近に二ヶの新しき會場が増築された、又七十一の兵營附近に各集會場を設けられた、殊に外國傳道的精神が發達し來て大に運動をなした、乃ち從來は十一萬圓であつたのが昨年は十六萬圓に上つた、最も伎倆ある役人が十二人外國傳道に身を委ねた、現時有する會館の数が四百

造の會館を建築した、其中には讀書室、遊戯室、會員談話室、授業室、打毬場、玉突場、喫煙室、運動場、浴場及び澤山なる寢臺が設けられてある、何れも聖書研究及び教育事業の普及は著しきものにして、クレイブランドの青年會にては工場の際の時に於て聖書研究をなす事とし、而して他の一百の會も同一の方法を以て好成绩を收めた、大工場管理者の云ふ處によると、二十年間工場内に於ける野卑不品行の氣風が根絶せんと勉めたれど毫も其効なかつたが、一たび晝飯後三十分間聖書研究會を開きたる後一年を経ざるに其効果著しかつたをうである。

▲鐵道部 各線路に於て此部門が著しく發達した、從來會員四方三千人たりしが今は五萬人になつた、丁度此増加数は此部門をひらきてより、十二年後に有したり會員總數と同じ事である、九ヶ所の新しき本部が増加して十二の會館が建設せられ、八十四の鐵道會社が四十八萬圓の金を寄附した、殊に教育宗教の仕事が著しく發達してある、今米國では鐵道布設に供ふて是非青年會を建築せねばならぬやうになつてある、三年以前には僅かに五つの本部と所々借家の集會所であつたのが現今は二十五の本部ありて十七の新しき會館を有し、其價七十萬圓であるとの事である。

▲教育部 (一)系統的讀書、教育的講演、實際的談話、教育的俱樂部等は、大なる利益を興へて居る、(二)各洲委員の數

五十で其價が四千八百萬圓以上である、而して俸給を拂ふ役人が一千八百人ある、殊に昨年に於ける成績の最も著しきは聖書研究及宗教禮拜に多數の人間が出席した事である、九ヶ月の間各日曜日にて禮拜出席者が七萬八千人、聖書研究者四萬三千人の割合であつた、以上は亞米利加に於ける昨年一ケ年間の成績であるが、若し全世界に於ける成績を舉ぐれば現時本部の数が七千五百〇七で、會員の總數が六十二萬〇六百二十一である、而して會堂の数が七百三十七で其價が六千四百萬圓以上である。

▲都府に於ける青年會 昨年中に於て會員數建築物及其効力等に於て發達せしのみならず、殊に青年の需用に劃切なる計畫を擴張した、乃ち工業に従事する青年に於て事業を擴張した、工場及製造場に關する特別なる青年會の數が從來四十三であつたが殆ど一倍に上つた、アラスカ、モンタナ、ミシガン、コロラド等に於ける鑛業、ウルモントに於ける大理石業、アルガンサスに於ける材木、南カロリナに於ける綿業等に從事せる青年間に擴張した、又ジョージ湖邊の夏期集會場も昨年新設せられた。

▲工業部 近時工業の發達に供ふて萬國聯合委員が此部門を設けて、工業に従事せる青年の便益を計ることとした、殊に或工場に於ては工場に附屬せる青年會を設くるに至つた、ベルモントに於ける大理石會社の如きは六萬圓の價ある大理石人を以て各洲教育委員を組織し、而して各洲書記官の一人は都府及鐵道青年會の事業を獎勵するが爲めに若干の時間を割くこととした、(三)昨年中新に加りたる三都府は教育主動者を定めることにした、(四)勞働者、兒童に於て教育部を擴張し、殊に鐵道業者に於て圖書館を設立せられた、(五)青年會の多數は、高尚の問題に於て研究することとなり、乃ち蒸氣工學及應用科學等の學科にして高等なる教師を雇入れることとした、(六)昨年新設せる三種の青年會は各々初等手藝を教へることとした、(七)夜學校出席者は二千人にして出席會數二萬九千回であつた。

▲陸軍部 青年會の實際的効果は著しく社會に認められて、已に國會に於て陸軍大臣の提出せる議案は通過するに至つた、其議案とは陸軍豫備兵の爲めに青年會館を建設すべしとの事であつた、直に大統領によりて承認されたのである、ハリッピンに於ける兵隊の爲めに昨年中寄附せられたる總額一萬四千圓である、キューバ及アラスカに於て十六の兵營のある處に青年會を建設した、全國に於て十二の新しき場所が開かれ、而して各兵隊に愉快なる家庭を興へることになつた、昨年に於ける兵營の數が六百三十二で委員の數が二百二十一人、教育の級數三百三十六、圖書館百四十六ありて十七萬五千卷の書を藏し、四十六ヶ所に於て此部分に入りたるもの四萬人以上に上り、病氣及不幸者を見舞ふと三千回、文房具

四百萬個を費した、而して兵士聖書新編同盟及び軍人禁酒同盟は昨年中に其會員を増加すること従來の二倍である、福音的集會に出席せしもの十万人にして、七十一の會館若は會場は之が爲めに用ゐられ、八万圓の金は陸軍青年會の建築の爲めに費やされた。

▲海軍部 昨年中に於て著しき擴張は九月十五日に於けるブルクリン新會館の建築と七月一日ノールフルクに於ける海軍部の海士及ニールポルトに於て此事業を始めた事である、ブルクリン會館に於ては其開始以後六ヶ月間に於ける出席者六万七千六百六十人にして一日三百六十五人の平均なり毎晩宿泊するもの百五十人平均にして一日會食するもの二百三十七人である、遊戯をなしたる度數三万五千八百四十三回にして、七百〇六人戸棚を貸し與へ又水夫が貯金すること千〇六十四万七千六百十六圓である、ノールフルクに於ては開館以後出席者一万八千八百三十一人で、宿泊者三千〇二十二、戸棚を貸し付二百人、ニールポルトにては兵士と水夫と合併して會場を設け、九の圖書館がある、海軍禁酒同盟會は五千五百人に達した、要するに海軍青年會の會場を見舞ひたるものは、何れも非常なる便利と保護を得るを以て漸次入會者増加の形勢である。

▲男兒部 十八歳以下の男兒の入會したるもの七萬人ある、其内約五萬人は正しく小兒部に屬するもので、他の二萬人は

研究會に入れる人員は現今一萬五千人に増加した、學生は從來よりも入會するもの多くして専門校若くは大學の建設されたる地方の爲めに其等の學生は傳道及慈善事業に従事した、昨年は學生間に最も好結果を收めたる年であつた、コルトン氏傳道的盡力は非常に有効であつた、第四回學生有志運動會は昨年開かれて之が爲めに青年間の團結を堅くした、殊に從來の困難に打ち勝つて驚くべき成績を挙げたはハーバートの御蔭である。

▲黒人部 學校内に於て六十七、市街に於て三十四の青年會ありて會員の數殆ど七千人である、十四の新しき青年會及一千人の會員は昨年増加したものである、未だ會て昨年程擴張したる事はなかつた、ブルクリンに於ける新會館はジョーシ、フォーター、ヒーボデー氏の寄附にして之が爲めに市中に於ける黒人は非常に便利を得、蓋し黒人教育の如きは青年會の力を入れた事業の一である。

▲野外運動講習學機 六年以前に於ては生徒四十八人であつた、三年以前にては五十六人、昨年は八十九人の上つた、而して其内十八人は青年會の事業に従事して居る、昨年擴張の爲め費したる額は八千二百四十四圓にして、基本金増加額一萬千圓であつた、一年四學期に分つて終年學校に出席する仕組みで教育學、其他特殊の學術も教ふる事である、また歴史的及生理的實驗室も擴張されて五百卷の書物は圖書館に増加され

上は他の部門に屬するものである、昨年の仕事は勞働に従事せる小兒の爲めに力を盡した、殊に工業に従事する青年の體育を注意し、また高等學校の兒童に注意し其宗教的薰陶に付て力を費やした、壯年者に向ひて屢々宗教的會合を催された、小兒部の會員は非常に増加して現時五萬人の兒童に向ての設備も不足を感じて來た、爲めに俄に増築したる新會館も未だ壁の乾かざる間に忽ち來會者を以て充すに至つた、而して教會に於ける兒童の取扱と此部分とは互に相聯絡して兒童の便益を計るとしたたのである。

▲體育部 會員數十萬の男子及兒童がある、全青年會員中百分の四十八は體育に従事して居る、運動場の數凡そ五百所ありて其價格は凡そ五十萬圓である、教師及補助員は三百人ありて學理的原理より割出したる體育法を授け、其運動間に於ける親密を保つことに勉めつゝある、此體育教師が宗教的禮拜の時に自ら率先して出席する事になつてゐる、級の數百十九ありて千百十五人は其内より教會に新に附屬するに至りた、青年會は各都府に於ける運動家の中心本部となれる有様である。

▲學生部 昨年中學生會新設せられたるもの三十にして、會員七百人以上に上る、凡そ五十萬圓の價格ある學生會館は建設された、殊に神學研究部は著しく發達をなした、夏期集會は四ヶ所に開かれて一千人を下らざる出席者あつた、聖書

た。  
▲職員團體及養成學校 シカゴに於ける聖書部に於て七人の教員ありて相關係したる十ヶの課目を教授しつゝある、其中四人は青年會の歴史と經濟を教授し、三人の教員と二人の補助學生は體育部を教授して居る、昨年は概して従前よりは教育上好結果を奏した、又セネペ湖邊に新に土地と建物を得、此團體の昨年に於ける増加したる純収入は三萬圓にして、年々職員はセネペ湖邊に於て集會を催す例なるが、一昨年は出席者六百四十七なりしが、昨年は八百〇七人であつた。

▲以上は只米國に於ける昨年一ヶ年間の報告である、若し倫敦ストランドの青年會本部エキセターホールを中心として、英國本國及び植民地其他大陸各國世界到る處に設けられたる多年の成績を考ふるに實に廣大なるものである、既に本年一月十八日より二十日まで米國ワシントンに於て米國全洲青年會の五十年紀念祭を執行したとの事である、吾人は歐米に於ける盛況を見聞するに付ても、我國に於ける佛教青年會が一日も早く如此熱心にして且つ生氣ある社會的事業に成績を挙げられんとを切望するものである。

閑 文 字

◎在獨逸の藤岡君より邦の面白き手紙が来たから此に掲げて見よう、またがに言文一致の本家たけありて甘いものだ。

▲政教時報は下手な電話のやうに送つてくれる事が嫌なないが甚だ心細い、最もいやにむづかしいことのはひひて見たくないが、中にはうれに依て日本のあることを知ることを出来るのがあるから、面倒くさくなくつたついで送つてくれ玉へ。

▲精神界は毎月くるから初めからしまひまでよむ、而しどうも僕には合點のかねところがあつてこまる、文章がむづかしいといふのもない、意匠が高尙だと云ふでもない、その外にわからないところがある、これは獨り精神界に就てばかりいふべきことでない、政教時報にも無論いへると思ふ、僕などはこれでも多少文字が読めるから又當世の文もちつとつは覺けたから文句はわかるのだ、文句がわかるばかりでない、おつしやることもみこめる方が多いのだ、だが、しかし、あれで以て世間の多數の人にわかるだらうか、そんなところが先うかひたひ、精神界でいつて見れば大元氣靈經等の講義があるが、其講義の中にやつぱりむづかしい言葉があつて所謂解の解がある、うればかりでなく三箇箇讀ださか大事因縁だとか其字のちよつと眼にうつたところ、其おとの耳にきこえたところだけでは、どうもわからない人の方が多い様な言葉をどしどしとなまつてつてあるからまことに消化がしにくい邊がある、仲間内の人達は何だかよろこばしさうにいつていられる様だが、自分でうまいばかりで人が味ふかどうかわかわらないでいられるのではあるまいか、それをかまはないでめて共に法を樂むのさ云ふのはどうだらう、此場合の共といふ言葉の範圍が明にありたひ。

▲政教時報もやがましいチンツェンドルフ伯とか何とか譯文がまづまあ大した齒こたえのありそうなものにならなてめた様だが、あれ等は齒むけのちよつと向ぢやないんだらうね、僕が思ふのはたとひちよつと以上の達者な人に施すものにしては送分が多くてそしてこなれるよい方がよいと思ふがどうだらう。

▲一休全体佛敎の方の敎師のおつしやることは常にむづかしさりと世間でいつてゐるぢやないか、それに英語だとか梵語だとかえらいものを備ひこんでます(こぼらしくしてまふのはあまり無慈悲だらう、うれも學術の難點とか或は諸君とてそういふ御講立の必要なものならしやうがそれがさうでない主義でな

信 界

佛弟子小傳 (十二)

近 角 常 觀

尊者堅伏。尊者面王。尊者異乘。尊者仁性。尊者嘉樂。尊者善來。

此諸佛弟子の傳は詳かに徴し難い。却て歴史上の傳記よりも、此人々に關する本生 Jataka 即ち過去世に於ける物語及因縁が分かりてある、抑々此本生なることは佛陀說法の一方法であつて、其眼前にある出來事、若くは其人々の特性を撰んで、是單に偶然に存在するものにあらず、佛の前世に於て色々の生を受けて人生の救済を企て玉ひし時、今の場合と類似の出來事、同様の性質を有する人がありて我と因縁を結びた、其人とは即ち汝であるといふ様に説き玉ひたものであつて、其幽遠なる事實と剴切なる物語とは深く人心を感動して、忽ち道に入るの志を促したるものである、是れ佛敎文學として最も古きものにして、佛滅後直ちに五百五十の佛の本生を集めたとの事である、今錫崙に傳はりて居るのは西歷紀元前二百五十年頃バトナの結集の時集めたものが傳はりたとの事である、其中には巧妙なる譬喩もあり、輕快なる寓言

べく多くの人に見てもらひたいと思ふものではどうも感服が出来ない。

▲政教時報のふりかへるもよいが、自分の商賈がらに近いからとて餘計なおせぢいをすると思はれるか知れないが、實はこれは決して餘計やないんだ、僕が商賈がらひのこまをいひだして嚙犬にほへつかれるとおそろしいから、無論商賈がらだけ責任を以ていふのだから僕がいふ通りになほす氣はないか、つまりなほひきりやすい文字でおもしろい見せ方でも僕がいふ方にみかたを求めることばたやす徳の諸師がたがなかつたあさを見て僕がいふ方にみかたを求めたことばたやすいと思ふ、釋迦に既法だからくごくはいはない、徹頭徹尾言文一致にしてしまつて紙敷がふえだてかまはず出来るたけこむづかしい漢字をのけてしまひ玉へ、うれば甚たかきにくくてこまるさいふだらうがもさく自分の便不便より他人の便不便を考へる方が此程のしこまの主意だからさういふ理窟は採用することが出来ない道理だ。

▲日曜語など言文一致にしてのせたらごんなにおもしろいかもしれないと思ふ、僕がうれが感ぜられて紙上に君の聲が聞こえる日を待てる。

▲去年の十一月の末頃は零下十七度までいつてからぶきの寒風に耳がとびさうであつた、それに十二月頃からめつきり暖かくなつて零下になつたことはない、けふもたしかに十一度と云ふ暖かさ、實にけしからん氣候だ、日本はけふ小寒の入りて福壽草も陰では顔をさげる時分だにこらばこのありさま、不順にはこまりける。

▲ザクセンの王太子妃殿下は五人の皇子があるのに、その醜態はさうであるが、妃は當年三十三才で男は白耳液のもの二十四歳で佛國の敎師として王宮に出入して居たもの、早速には捕はれたが、やつと瑞西のシユネアでさがしたされた、妃は遂に發せられた、ザクセンの先王崩して半年ならぬにこの体たらくことに今王の重病さきくさへ氣の毒だと思ふ。(一月五日、ライヒチヒ發)

藤島瞻岳師より左の詩を寄せられ候。  
落日悲風靈樞前。薰香慟哭淚潸然。津梁一代無溫席。敎學多年不卸肩。德澤遠流龍谷水。恩容終化鶴林烟。傳燈法嗣歸何晚。望斷天南萬里船。  
右奉挽 明如宗主

會駕西槎遊不空。壯圖又試半球東。遺文欲拾龍天選。求法何論顯獎功。鉄錫曉衝葱嶺險。衲衣寒籠雪山風。遍探靈蹟無無感。千古興亡兩眼中。  
右迎鏡如宗主歸朝恭賦

もあり、適切なる道徳的敎訓もありて、一般世俗に向ては乾燥なる哲學的論議よりも偉大なる感化があつたに違ひない、今は此佛弟子に關する本生を自ら説きたもので、即ち漢譯の佛五百弟子自説本起經である、今其概畧を見れば、此人々の性質特徴を知ることが出来る。

尊者堅伏は豫興は樹提衛の事であらうと云ふて居る、彼は頗る謹嚴にして耐忍勉強する人で、精進禪定の點に於て秀て居る人であつた、彼自ら説て曰く、古昔樂頭摩國城に富豪家ありて阿能乾那と名けた、當時惟衛佛及び多數の眷屬を三ヶ月間請待した、時に我主人樂頭摩國王が最後の供養を爲さむと欲して心を盡した、乃ち我は帝釋の助けを得て、天上の衣服、天上の飲食、天上の座を以て一ヶ月の間佛及び佛弟子を供養した、かく一たび縁を結びてより九十一却惡道に墮せずして、常に佛陀に隨從せしが、今生亦王舍城頻波娑羅王の宮に生れ、亦家富み、王に事へた、然るに佛王舍城に來り玉ふに及びて欣然として趨り、遙かに望みて車を下り、謹て教を受け戒を授かり、一たび甘露の味に遭ひてより、一意動くなく清凉の地に達し、愁憂及啼哭一切の惱を解脱したと。

尊者面王は憍與は薄拘盧の事として居る、彼自ら説て曰く、我昔惟衛佛の時代に樂曇摩國に於て藥を賣りしが、比丘僧中病の爲めに瘦せて居る人に、藥を與へて疾を療治し、且つ諸病の藥を諸の比丘に施して不自由なからしめた、夫が爲め九

十一切悪道に墮せず、天上人間に於て福を受けたりしか、今生に佛陀に遇ひ奉るを得て、唯二夜にして三達智を證得することを得、常に粗衣を衣、家を棄てて道を學び、樂て閑居に在ること百六十年未だ曾て病あらず、欲少くして睡眠なしと云へり、以て此人の特徴を知り得べきである、然るに増一阿含經弟子品によるに、婆拘羅と面王とは別人にして、壽命極めて長くして中天せず、又常に閑居して衆中に居らぬは婆拘羅比丘にして弊惡の衣を著して、耻づるなきが面王比丘じやとある、又次の尊者異乗と云ふ人は戒行の點に於て顛脱して居つたと傳へるのみで、詳しくことは明でない。

尊者仁性は懷輿は戸利羅の事として居る、其名の名く慈恵心に富みた恵み深き人である、彼自ら説きて曰く、昔迦葉佛の入滅の時ベナレスに於て機惟王が七寶の塔を起てた、其時の最大の太子が即ち我であつて、佛の爲めに第一に刹柱を建てた、そか爲めに天上人間に在りて、常に殷富にして慈善を行ふことを樂みにして居た、我五百世の間かくの如く繼續して、今亦釋種の豪家に生れた、幼時より財物を人に施し、貧窮を救濟せよと言ふた、家中吾言を聞きて或は惶れ或は愁ひたりしが、母か恩愛を以て、若しや鬼神が言はせるのではないかと氣を揉んだが、宿命を以てかく慈善深く生れたのであることを知りて、皆喜びて我が志を許して、施を行はしめ、多くの眷屬を恵むゆへ、衆の爲めに愛せられ、見る者皆喜ば

ぬものはなかつた、夫が爲めに家も興り人我を名けて戸利羅と名けた、我欲する如く慈善を行ひて出家して道を得、生家は益盛にして國王大臣を初めとして一般人民の欽慕する所であつた。

尊者嘉樂は即ち牧牛難陀の事である、頻婆娑羅王佛を請待して三月安居せしめた、時に牧牛者難陀近處にありて日々牛乳を送りた、王之感じて佛に見えしめた、彼佛は本王宮に生れ玉ひたるものなれば、牧牛のことを知り玉はしと思ひて、牧牛の事を問ひて佛を試みた、佛忽ち牧牛に關する十一の注意すべき點を擧げて、求道修行の上に比較し、精神牧養の必要を悟されて、此に於て忽ち佛門に入り解脱した人である、彼自ら説きて曰く、我嘗て王舎城の東に住する富貴者たりき、時に年飢饉にして穀貴し、有道の士來り遊ぶも、我獨り坐りて食ふ、好道の人來り頗る悟達して居つた、我嫉意を起し、馬と同様の難食を喰はしめた、彼之を食て直ちに死んだ、我壽終りたる後久しく地獄に墮し、常に食事を見て得る能はず、叫喚苦悶し、人世に生れて常に疾病に罹り、懊惱して、五百世を経た、今幸に佛に遇ひ解脱を得たりと雖、猶身體疾病多くして安穩にあらずと云ふた。

尊者善來は莎訶比丘のことである貨竭とも云ふ、給孤獨長者の子にして、初め生れたる時父が善來と呼びたからかく名けたと云ふ、非常に薄福なる人で家産は亡ひ父母は死んだ、

釋法給の遺跡に近く起臥して、君の清福を祝す。  
印度ベナレスにて 姉崎 正治

報 道 一 束

●此頃は氣候順を失ひ、あたら陽春駘蕩の時節をして、何事ぞ風雨多からしむの怨み有之候。世の中は何事も思ふ半分にもゆかず候。

●西本願寺法主は去る十三日無事歸朝致され候事は何寄の事に存候、頃日同法主が將來の教界經營に就て或人に語られし一節を左に紹介可致候。

余は多年海外に旅行して本土の事情を知悉せず、不幸にして旅行中法脈を相繼して一宗派百年の大計を繼ぐ可き大責任を負ふに至りぬ、吾木山今後の方針に就ても勿論十分調査せし上にあられれば發表する能はざるなり、然れども歐洲各國に於ける宗教界の大勢に徴するに、吾眞宗が此際別に宗教の眞理を研究し、宗教眞理の改善に努めざる可らざるの必要を感じざるも、宗教行政即ち如何にして宗教と社會とをなして益密接ならしめ、如何に宗教を利用せば社會を改善し、社會に貢獻するを得可きか、如何なる方法手段に出づれば、社會に利し又自ら利する事を得可きか、是れ我崗今後の宗教界に於て最も緊急なる問題なり、佛教其物の眞理は現に角宗教と社會との關係即ち宗教行政の一事に至りて印度支那等の現狀に比較すればイザ知らず、之を歐洲の宗教に比すれば未だ幼稚の者さばざる可らず、而して宗教行政の發展を計るには、先づ吾派内積年の弊害より振刷し、自ら進んで其中心となり、延いて他宗派の聯合一致を計らざる可らず、其意氣頗る昂れる者の如し、但し決して急激の改革を行ふ可らず、徐々改善の覺悟なかる可らずとの事は幾度も繰返し語れり云々

尙ほ同法主は軌近印度に於ける、種族の軋轢益甚切く、各人民の階級益分離し、甚しきは各級の人民其職業に依りて、各自自ら區別して到底一致する能はず、印度佛教の日に衰頹し、

人皆呼て惡來と云ふた、乞丐をして居つたが、殃が及ぶと云ふて故舊が近けず、剩へ糞聚に擲つた、彼啼泣して臥しつ、あつた所へ、佛陀が通られて阿難をして善來々々と呼ばしめられた、されど自分が呼ばれて居るのであるを氣が附かなんだ、佛引て先づ半食を與へられた、彼、此位の少量は我飢を醫するに足らぬと云ふた、佛勸めて食せしめ玉ひたる所、彼大に歡んだ、又衣の角にある一小錢を見附けて青蓮華を買はして、僧衆を供養せしめられた、華の開けるを見て昔の前身を憶ひ、初果を得た、彼自ら説て曰く、古昔我般頭摩國にありて財寶多く容貌端正にして衆の姝女を従ふ、一日駕して出て道に沙門を見て、惡意を起し、其形を憎み、罵りて曰何ぞ鬚髮を下し、顔黒く、癩癩し、身意共と腐るゝやと口惡語を發ちたるが爲め、壽終りたるの後、地獄に入り、出て、後猶顔黒く、癩癩し、身意俱に腐れ五百世の間苦みつゝありし、幸に佛陀の大慈哀なる方便を以て我を率さよせ告て曰く、善く來れり、此座に坐せよと、恰も老象を援て深泥より出すが如しと、後此人は龍王を降伏して人民を安樂にした、爲めに人民が酒醬を捧げた、善來醉て地に臥して居つた、佛深く其弊害を認めて、初めて飲酒戒を制せられたとの事である。

明治三十六年一月廿日波奈羅斯へ参り、姉崎兄と同宿、鹿野園  
等参拜、今より一人 Alidhahuti 出立可仕候。  
印度ベナレスニア 廿三日 朝 藤井 宜正

マホット教の追々旺盛にして、兩派の軋轢又頗る甚だしき  
の狀態等に就ても深く感ずる處ありしとの事に候、又法主は  
歐洲を出發するに際して、數萬部の書籍を購入し、印度支那  
等に於て手に入れし珍奇の圖書又少からず、本山の事業とし  
て取敢ず一の圖書館を設置する由に候。

●昨年佛骨を名古屋に移したるに付、舊負債十三萬六千圓  
は名古屋の協賛會より償還するとの契約あるにも拘らず、其  
内三萬圓丈償却せしのみにて、殘額は尙尙其儘となり居り、  
爲めに元會長村田寂順師を始め舊役員何れも大に困難を極め  
つゝある由に候、結局如何になるや漠々たる有様に御座候。

●帝國憲法の發布は、明治二十二年二月十一日なれども、  
其以前に於て推古天皇十二年四月三日彼の聖德太子の十七箇  
條の憲法發布あり本年は恰も一千三百年に相當するを以て、  
東亞佛敎會の發起に依り、來る四月三日四日の兩日神田錦輝  
館に於て紀念大會を催す由に候。

●京都の濱岡光哲氏は、藤田傳三郎氏と共に、大谷派本願  
寺の負債整理の爲め、門末門徒を株主とし、自ら頭取となり、  
百五十萬圓の資本を以て本願寺の機關銀行を設立せんと計  
畫あり候由なれども、到底此目的を達する事は出來ざるなら  
んとの事に御座候。それについても今月中旬頃、井上伯は都  
築氏を從へて京都に趣かれ候は、注目すべき事柄に候。

●此頃ミランにて奇怪なる富籤の會を催され候、先づ十リ  
ラの金を投じ富籤を買ひ、當籤せば美人と結婚して其の持參  
金をも收むべしとの事に候、此風變りの抽籤に當る美人は都  
合八十三人にて、切符買上高を平等に分配して持參金を造る

は曰く博士は犬の頭を切りたる後アドレナリンを注射し人工呼吸法を行ひ胸  
部を秩序正しく壓迫して十時間餘其犬の生命を保たしめたり又博士は一匹の犬  
を殺して最早尋常の手段にて蘇生せしむる能はざることを確めたる後アドレ  
ナリンを注射したるに犬は忽ち蘇生して平生の如くなりたり此發見は電死或  
は絶死したる人に用ひて効力あるべしなり

右の如く、之を人間にまで應用すべくは廿世紀の大發見に  
御座候。以上

三月中旬 北海のはてより

●小生當地へ赴任致候已來、最早々午年に垂んとする次第に候へ共、更に得る處  
無之候、只日、醒醒たる事務に勞苦するのみ誠に慚愧之至に不堪候、從て充分之  
視察も行届不申候へ共、當初相考候には、何れ北海道は内地にては身を措くに處  
なく、止むなく逃げ延びたる如き輩多く候故、定めて罪囚の如きも横暴限りなき  
者多からんと思像致居候處實際に就て見候へば、左程の惡穢も無之響る意外の思  
を致候、其代り誠にこせく者たる小犯罪多し有之候、殊に當道は冬季に至ては  
殆んど勞働者の執るべき業務なく、爲に賭博若くは浮浪罪にて入監するもの層々  
有之候、而して別居留置者の多きには驚き入候、目今七百有餘の囚人中八十名の  
留置者を出し申候、殊に未丁年、幼年囚六十名の内拾二三名の留置者あるに至り  
ては、實に喜ばしからざる現象に御座候、是れ畢竟冬季には業務なき爲め監視引  
受に躊躇する結果と被考候、爰暫くを經過し鯉漁盛に相成候へば少しく減すべし  
との事に御座候。

●此頃懲治人男女各一名つゝ入場致候、何れも十二才に御座候、就て視察致し候  
處家庭も格別不真と云ふにもあらず、畢竟惡友の教唆により竊盜若くは詐欺的行  
爲を重ねたる可憐兒に御座候、惡むべきは其友の惡感化に御座候、之を以て思ふ  
に吾等は佛陀を友とし、其慈光に浴するは如何なる幸なるか、思はず感謝の聲を  
發し申候、當道本年は開拓以來殆ど例なき程の暖氣にて、人々其異例に却て安  
らす思ふ程の様子に御座候、然れ共流石は北海道今尙雪風吹き凄み申候、斯る極  
北酷寒の地にありて而も此開界裡に於て、彼等と共に大法を愛樂する事を得る  
は、誠に是佛陀の冥祐且は文明の餘澤と只吾等泣に咽ひ申候。

計畫に候、世の中は種々なる狂言行はるゝものに候。  
●教科書事件未だ結了せざるに、農商務省官吏收賄事件突  
如として起り候、世の中はどこまでも暗黒に御座候。

●教科書事件も追々と公判に近き候、中には事實を掩蔽し  
て白状せざるもの有之、裁判官なか／＼骨折との事に候。  
●基督教徒は博覽會を機として、會場前に基督教聯合傳道  
館を設け、本月一日より開始致候處、十日までの聴衆二萬人  
以上に於て、信仰告白者二百五十名に上りたる由に候、該教  
徒の運動目覺しきもの有之候。

●露國皇帝が此頃農奴解放の紀念日を以て、宗教上凡ての  
信條を寛容するの主義を布告したる由に候、露國々憲上の基  
礎にすくなからざる影響を及すべしとの事に候。

●修道學會其後の日曜講題如左候。  
修道の障礙(三月一日)  
思想の進化(全上)  
予の人生觀(全上)

如何にして信すべき乎(三月八日)  
信仰の聖域(全上)  
疑城の幽囚(全上)

●死したる動物を再生せしむる法發見せられ候由、此頃新  
聞紙上に見え候まゝ左に掲げて讀者諸君の一覽に可仕候。  
米國クリヴランド醫學校の外科教授クイール博士は死後十五分以内の動物は  
博士の發見せるアドレナリンと稱する醫液を用ひて再生せしめ得べしと稱し居  
る由なり此アドレナリンは諸動物の腎臓の上に在る腺より得るものにして血液  
を凝着する力を有す云ふ尙博士の實驗に就きて去月四日の組育ヘラルド新聞

申述度事種々有之候へ共凡長に亘り候故先は是にて獨筆仕候末筆ながら近角先  
生其他へ宜敷御禮登奉願上候頓首  
三月九日 石狩にて 大石生

郷里より

拜啓、歸來田園之風趣大に清らかに感下申候、窓前之梅花、瀟瀟の水仙  
一種の禪味を感下申候、特に野人之質撲たる、村童の無邪氣なる、時に  
青年會之爲に既き、戴白の媼翁と語る、其間却て無限の靈趣有之候、一  
週間田舎に居れば殆ど世外の人の如くに候、本日新紙を一瞥して世上  
の曉々覺へず微笑を洩し申候、五日はイヨ／＼出立晩較早青年會之爲め  
信仰談話會に出席、夜半名古屋迄参り一夕親友と會して、大抵六日晩に  
は諸君に御目にかゝるべく候。頓首  
琵琶湖畔にて 旭村生

日曜講話

毎 日 曜 午  
前 九 時 止  
開 會 所

求道學舍

本郷川一丁目番地

轉居

小石川區林  
町十番地

和田鼎

